



できごと

数十年ぶりの寒波に見舞われた 1 月 24 日（日）、25 日（月）に児童図書館研究会の全国学習会が姫路で開催されました。今年のテーマは「子どもと本を結ぶ図書館員の役割」。大月ルリ子氏の基調講演、4 つの分科会、交流会など、様々な企画が用意されていました。

大月氏の講演では、子どもに本が必要な理由、子どもにどのような本を手渡したらいいのかが話題になりました。分科会では、ビブリオバトルや書評漫才について、学校司書と司書教諭の役割について、児童書の出版について、ブックスタートなどの乳幼児へのサービスについて、それぞれ報告がありました。交流会も地元姫路のお話や書評漫才の実演、ぬいぐるみのお泊り会の報告など、興味深い話をうかがいました。2 ページ目にて、概要を紹介します。（青木）

子どもの本に関する賞

今号では、この1年間に発表された子どもの本に関する各賞をご紹介します。

賞には、子どもの本でまちを盛り上げたい、伝統ある賞を守ろうという主催者の思いが感じられます。それが子どもにとって楽しめる本なのか、私たちが手渡したい本なのかは、実際に手に取って確かめていただきたいと思います。3 ページ目にて、概要を紹介します。

「本とともだち(幼児版)」配布開始

静岡県教育委員会社会教育課では、読書啓発リーフレット「本とともだち(幼児版)」を作成し、3 月から配布を始めます。幼稚園や認定こども園、保育所に通う年少児のお子さんがいるご家庭へ配られるほか、市町立図書館や社会教育課 web サイトでも見られます。（眞子）

◇子ども図書研究室のテーマ展示

ただいま展示中です！

- ◆さくらの絵本
- ◆「ニッサン童話と絵本のグランプリ」と子どもの本に関する賞
- ◆新着図書も展示中です

◇イベント情報 その1◇

◆静岡県立中央図書館 企画展

「静岡発！昭和の幼児指導絵本『あそび』展」

会場では、絵雑誌「あそび」がつくられた時代背景や「あそび」の実物、原画の他、同時代の子ども向けの雑誌を紹介합니다。

- 会 期 2月19日(金)～3月24日(木)
午前9時～午後5時
※3月8日(火)、21日(月)は休館
- 入 場 無料
- 会 場 静岡県立中央図書館 3階展示室
(静岡市駿河区谷田 53-1)
- 問合せ 県立中央図書館企画振興課企画係
電話：054-262-1246

◇イベント情報 その2◇

◆静岡県読み聞かせネットワーク講演会

「子どもの本を訳すこと

—作品と作家との出会い、そして—

翻訳家の伏見操さんを講師に迎え、子どもの本の翻訳についてお話しいただきます。

- 日時 3月27日(日) 13時30分～15時30分
- 会場 静岡県立中央図書館 3階会議室
- 定員 80人
- 参加 無料
- 申込 住所・氏名・電話番号を電話またはFAXで
電話：054-245-5843 (飯野)
054-253-7787 (勝山)
FAX：054-253-6246

〈伏見操(ふしみ みさを)氏プロフィール〉
1970年埼玉県生まれ。上智大学フランス文学科卒。フランス語、英語の児童書の翻訳をしながら、ときどきエッセイも書いている。日本とフランスを往復して暮らす。主な訳書に『トラのじゅうたんになりたかったトラ』(岩波書店)、『ねむいねむいちいさなライオン』(徳間書店)、『うんちっち』(あすなる書房)など。

1月24日(日)、25日(月)に兵庫県立姫路労働会館で児童図書館研究会全国学習会姫路学習会がありました。その学習会から大月ルリ子氏の基調講演と第1分科会「子どもと本を結ぶ—新しい潮流」について報告します。

大月ルリ子氏の講演は、「本当に子どもに本が必要なのか」というラディカルな問いから始まりました。この問いに対して、まず、文字の誕生について言及し、「文字があるために本から知識を得、本を通じて楽しい経験をして成長することができる」、また、「本を通じて楽しい経験をするためには、子どもは耳から言葉を十分浴びる必要があるにもかかわらず、現代の子どもはかつての子どもよりも言葉のシャワーを浴びていない。だから、読み聞かせは必要だ。」ということを指摘なさいました。その前提を受け、「子どもはお話を聞きながら、主人公と一体化し、主人公の体験を追体験している。このようにして生きられた物語は、子どもの心に刻印を残し、後々まで影響を与える」と、子どもに本が必要な理由を説明されました。

選書についても「本を楽しんだ人は、本を提供して楽しみを共有したいと思う。おもしろい本があれば、それを薦めたくなくて、薦めるといのが図書館員の本質であり、そのために専門的な教育を受け、日々研鑽を積む必要がある。図書館員は、まず古典作品を読むことから始めるべき。古典には長編作品も多くあり、一人では読み通すことが難しい。そんな時は、勉強会を組織し、複数の人で読むといい。他の人からの刺激で視野も広がり、古典の持つ楽しさを共有することができる。また、期限があるため、無理をしてでも読むようになる。嫌々読み始めても、面白くてやめられなくなるのが古典作品なので、まずは読む機会を作ることが大切。古典を読んだときに感じた楽しさ、喜びを感じる

かが新刊本を評価する際の基準になる。」とご自分なりの選書基準の作り方をおっしゃいました。

分科会では、大阪市立住吉図書館の和田充洋氏が書評漫オグランプリの企画立案、実施、課題についてお話しくささいました。

大阪市立中央図書館ヤングコーナー主催事業のアンケートの結果、図書館に希望する行事として最も多かったのが「お笑いコンテスト」。でも、お笑いコンテストでは、図書館で実施する必然性がないため、漫才風の会話で本を紹介して競い合ってもらえばいいということになり、書評漫オグランプリを行うことになりました。

日本初の企画であったため、当初は参加者集めに苦労したこと、徐々に参加者、観覧者が増え、第4回は小学生の部と中学生以上の部の2部制になったこと、協賛企業がついたことなどもお話しくささいました。

「書評漫オグランプリにより、これまで来館する機会の少なかった方が来館するきっかけになったが、イベント以後、継続的に利用しているかはわからない。ただ、図書館を知ってもらったことだけでもよかった」と課題も含めて成果も指摘なさいました。

なお、書評漫才については、インターネットの動画投稿サイトにアップされているものもあるとのこと。

子どもたちの読書離れを防ぐには、いい本を選ぶこと、本に触れるきっかけを作ること、この両方が大切だと改めて感じた学習会でした。

所蔵資料から

『子どもとことば』 岩波新書 黄版 179

(岡本 夏木/著 岩波書店 1982年1月)

大月氏が講演の際に紹介した一冊。子どもが言葉をどのようにして獲得するのかを説明した本です。同著者の『ことばと発達』とともに、子どもの本に関心を持つ者の必読書として紹介されました。

(青木)

子どもの本に関する賞

文学賞には、出版社や協会が主催しているものがある一方で、地域との繋がりが強いものも多くあります。子どもの本に関する賞も同様で、例えば北海道の剣淵町は「絵本の里けんぷち」としてまちづくりを行っており、「絵本の里大賞」を選出しています。また岡山市は同市出身の坪田譲二を冠した「坪田譲二文学賞」があり、静岡県では県内の書店員有志の実行委員会が「静岡書店大賞」を運営、県内の書店員と図書館員が投票しています。（眞子）

所蔵資料から

文学



『おばけ道、ただいま工事中!?!』
草野あきこ／作
平澤朋子／絵
岩崎書店 2015年8月

4年生の翔太の部屋は、死んだ人がおばけ界にいくための「おばけ道」が一週間だけ通ることになってしまった。翔太は道を管理するおばけの少女サトからもらったお礼のクーポンを使って、おばけと交流したり、おばけ界の秘密を教えてもらったりする。【小学校中学年から】

賞名	受賞作品（*印は当館未所蔵）
コールデコット賞	『Finding Winnie: The True Story of the World's Most Famous Bear』（Sophie Blackall／文・絵 未邦訳）*
ニューベリー賞	『Last Stop on Market Street』（Matt de la Peña／作 未邦訳）*
ケイト・グリーンウェイ賞	『Shackleton's Journey』（William Grill／作 未邦訳）
カーネギー賞	『Buffalo Soldier』（Tanya Landman／作 未邦訳）
小川未明文学賞大賞	『ななこ姉ちゃんのふるさと』（宮崎貞夫／著）*未刊行
けんぷち絵本の里大賞	『もったいないばあさんのてんごくとしごくのはなし』（真珠まりこ／作・絵 講談社）
講談社出版文化賞絵本賞	『ボタ山であそんだころ』（石川えりこ／さく・え 福音館書店）
五山賞	『ごん助じいさまとえんま大王』（わしおとしこ／文 伊野孝行／絵 教育画劇）*
産経児童出版文化賞大賞	『きみは知らないほうがいい』（岩瀬成子／作 文研出版）
静岡書店大賞児童書新作部門	『ママがおばけになっちゃった!』（のぶみ／さく 講談社）
静岡書店大賞児童書名作部門	『はらぺこあおむし』（エリック＝カール／さく 偕成社）
小学館児童出版文化賞	『オオサンショウウオ』（福田幸広／しゃしん ゆうきえつこ／ぶん そうえん社） 『どろぼうのどろぼん』（斉藤倫／著 福音館書店）
坪田譲治文学賞	『いとこの森の家』（東直子／著 ポプラ社）*
ニッサン 童話と絵本のグランプリ	『タンポポの金メダル』（山本早苗／作 青井芳美／絵 BL出版） 『せかいのはての むこうがわ』（たなかやすひろ／作 BL出版）
日本絵本賞大賞	『ふしぎなともだち』（たじまゆきひこ／さく くもん出版）
日本児童文学者協会賞	『あひるの手紙』（朽木祥／著 佼成出版社）
日本児童文芸家協会賞	『空へ』（いとうみく／作 小峰書店）
野間児童文芸賞	『うたうとは小さいのちひろいあげ』（村上しいこ／著 講談社）*
ひろすけ童話賞	『わたしちゃん』（石井睦美／作 小峰書店）
福島正実記念SF童話賞大賞	『おばけ道、ただいま工事中!?!』（草野あきこ／作 岩崎書店）
福田清人賞	該当作なし

新着資料から

知識

『あつめた・そだてた
ぼくのマメ図鑑』
ちしきのぼけっと 21



盛口満／絵・文
岩崎書店
2015年 11月

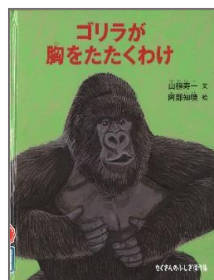
マメにもこれほど種類が豊富だったのかと驚かされる。マメだと思っていたものが実はマメ（マメ科）ではなかったというものもある。

花や葉、根の様子、さやを食べる種類とマメを食べる種類と様々なマメ・さやを忠実に描き上げて紹介している。マメを好む虫のページまであり楽しく読める。

著者がマメに注目するきっかけとなった1メートルにもなるさやをもつモダマというマメも紹介されている。基本を実物大とし、拡大表示の案内あり。【小学校中学年から】（青山）

知識

『ゴリラが胸をたたくわけ』
たくさんのふしぎ傑作集



山極寿一／文
阿部知暁／絵
福音館書店
2015年9月

映画「キングコング」のイメージなどから、凶暴な動物と考えられていたゴリラ。特に胸を叩く「ドラミング」は戦いを宣言し、相手を脅す行為と言われていたが、著者の研究によると、あいさつや遊びの合図など、日常の様々な場面で使われていることがわかる。他の群れに対して近づかないよう警告し、群れ同士の争いを避けるためにも使われる。霊長類研究者である著者はアフリカでの観察を元に、ゴリラは平和を好む動物だと伝えている。絵はゴリラを専門に描く画家によるもの。【小学校高学年から】（仲本）

絵本

『ワンガリ・マータイ
「もったいない」を世界へ』
伝記絵本世界を動かした人びと



フランク・プレヴォ／原作
オーレリア・フロンティ／絵
高野優／監訳
坂田雪子、長井佑美／訳
汐文社 2015年 10月

「もったいない」という言葉を世界に広げたワンガリ・マータイの伝記絵本。この絵本では、人々の暮らしをよくしたいという彼女の思いと、その思いを実現するために彼女が何をしたかが描かれる。彼女やケニアについて知ることができる1冊である。ただ、対象年齢を考慮すると、読み物の方が手に取られやすいだろう。

本シリーズには、他に『ネルソン・マンデラ』、『キング牧師とローザ・パークス』、『コルチャック先生』がある。

【小学校高学年から】（青木）

文学

『ぼくたちに翼があったころ』
コルチャック先生と107人の子どもたち』



タミ・シエム＝トヴ／作
樋口範子／訳
岡本よしろう／絵
福音館書店 2015年 9月

1934年、第二次世界大戦前夜のポーランド。片足が不自由なユダヤ人の少年ヤネクは、小児科医、作家として有名なヤヌシュ・コルチャックが設立した児童養護施設《孤児たちの家》で生活を送ることになる。《家》では子どもの自治による運営や子どもの法廷が行われていた。ヤネクは仲間とのいさかいや交流を経て成長し、やがて新聞記者になるという夢を抱く。イスラエルの元ジャーナリストが事実をもとに執筆。愛情をもって子どもと向き合う大人の姿が印象的。【小学校高学年から】（眞子）